

2024 年度入試問題集

■ 傾向と対策

■ 問題

■ 解答

AO 入試〈I 期〉 公募制推薦入試〈前期〉 一般入試〈前期〉

2024 年度 傾向と対策

傾向分析 標準レベルの難易度と設問の構成が特徴となっている

1 出題形式は？

AO入試・公募制推薦入試ともに大問数は3題、解答数20問の構成で、全問が4者択一のマークセンス方式である。試験時間は、国語または数学と合わせて60分である。

2 出題内容はどうか？

大問Ⅰは日常生活を取り上げた長文読解問題で、内容の理解に関する問題、語句の意味を言いかえる問題などが出題されている。大問Ⅱは会話長文の空所補充問題で、会話の流れに合う発言を補う。大問Ⅲは文法や語法に関する問題で、基本的な文法事項の理解を問うものが中心である。

3 難易度は？

長文・会話文、文法問題とも、問題文中で用いられる語句は平易なものが多い。文法事項も、高校での学習範囲の基礎を固めておけば十分に対応できる。

受験対策

1 文章は丁寧に読み、本質的な内容を理解しよう

AO入試・公募推薦入試とも、身近なトピックの文章を用いている。文章や選択肢に用いられる語句も平易なものがほとんどで、語注も参考にすれば内容を理解することは難しくない。ただ、本文と選択肢の間で語句の言い換えが頻繁にあり、設問との対応箇所を見抜くには、表面的でない内容の理解が求められる。第2問・第3問は速やかに済ませ、なるべく多くの時間をかけ丁寧に読み、解くようにしたい。

2 対話の流れを的確につかみ、流れに沿って解答しよう

対話の読解では場面と登場人物の把握がポイントとなるので、場面・状況の説明文や、同様の働きをする冒頭部分は丁寧に読んでおこう。選択肢に特に難解な会話表現などはなく、話の流れに沿って解答を選べばよい。空所の前後にヒントとなる表現が置かれていることもあり、疑問詞に対応する表現（時・場所・理由など）や代名詞・指示語などにも注目すれば、文脈の理解を補強できる。

3 文法問題は素早く解いていこう

AO・公募推薦とも小問数は5題で、基本的な文法事項が問われる。分詞や比較、態といった一般的な文法事項が中心だが、主語と動詞の一致など、文法学習の基礎となる項目の出題もあり、おろそかにはできない。ただ、問われている文法事項をしっかりと把握すれば解答は難しくないので、分量の多い第1問・第2問により多くの時間をかけられるよう、素早く解答することを心がけたい。

傾向分析 数学Ⅰ・Aの全分野からの、偏りのない基礎的な問題の出題である

1 出題形式は？

大問の出題は5題で、大問Ⅰ・Ⅱは必答、大問Ⅲ～Ⅴの中から2題選択し、合計4題を解答する。大問Ⅰは3問の小問集合、大問Ⅱ～Ⅴは1つの分野について3問の小問が出題されている。解答形式は全問マークセンス方式である。試験時間は国語または英語と合わせて60分である。

2 出題内容はどうか？

出題範囲は数学Ⅰ・Aであり、全単元からまんべんなく出題されている。AO・公募制推薦入試ともに必答問題は数学Ⅰから、選択問題は数学Aの「場合の数と確率」、「整数の性質」、「図形の性質」の3分野から1題ずつ出されている。また、数学Ⅰの基礎学力を確認するための問題を、大問Ⅰの小問集合で出題するなどの工夫がされている。

3 難易度は？

基本～標準レベルの問題が中心で、基礎学力を確認するための問題が多い。複雑な融合問題ではなく、教科書や参考書の例題などの典型的な問題が多い。難問は出題されていないため、典型問題をていねいに解き、類題演習を通して基礎学力の定着に努めれば対応できるだろう。

受験対策

1 教科書や参考書の例題に取り組み、徹底して基礎学力を養成しよう

基礎から標準レベルの、今までにどこかで見たことがありそうな問題が多い。したがって、教科書や参考書の例題を丁寧に解き、公式を理解するとともに使いこなせるようになっておきたい。しかしながら、公式を丸暗記しただけで解ける問題ではないため、教科書の節末問題や問題集の練習問題などを通して基礎学力の充実にも努めてもらいたい。

2 正確かつ迅速な計算力をつけ、読みやすく書けるように練習しよう

マークセンス方式の問題では、解法が合っているにもかかわらず、計算ミスや勘違いをしてしまうことは致命的である。普段の問題演習においても、解き方だけを見たり、途中で計算をやめたりせず、最終の答えを出すまで計算を行う習慣をつけておこう。また、計算は乱雑に書かず、どこで間違ったかが発見しやすいように、ていねいに書くことを日々の演習でも心がけるとよい。

3 できるだけ多くの過去問題を解くことで、実戦力を磨いていこう

出題範囲が数学Ⅰ・Aであることから、日程・方式の違いに関わらず、問題の配列、難易度、内容は似通っている。そのため、自分の受験する日程や方式だけでなく、できるだけ多くの過去問題に目を通しておこう。全分野について偏りなく出題されているため、過去問題の演習は、レベルや時間配分を体得するだけでなく、範囲全体を復習する目的としても有効である。

傾向分析 読解だけではなく、知識問題への対策も重要となる

1 出題形式は？

試験時間は英語または数学と合わせて 60 分となっており、マークセンス方式で解答する形となっている。AO 入試・公募制推薦入試ともに、大問Ⅰは論理的文章を題材とした長文読解、大問Ⅱは四字熟語、ことわざ・慣用句などの国語の知識を扱った知識問題と、2 題構成となっている。

2 出題内容はどうか？

論理的文章を題材にした大問Ⅰでも、漢字や対義語、慣用句といった国語の知識に関する問題が出題されていることに注意が必要である。読解問題として、傍線部分の内容や理由を問う問題、内容合致問題にくわえ、本文中での語句の使い方を問う問題が出題されている。また、大問Ⅱではことわざや慣用句に関する問題が出題されている。

3 難易度は？

漢字の書き取り、四字熟語、ことわざ、慣用句などは、一般的な語彙から出題されることが多い。読解問題の文章量は約 2,000 字と読みやすく、問題文自体もみ取りやすい内容となっている。

受験対策

1 学校の授業が学習の基本であることを心がけよう

どの教科でもいえるが、学校の学習をないがしろにしては学力を伸ばすことは望めない。まずは学校の授業をより有効なものにするよう予復習等をしっかり行おう。また、国語が不得意という人は、語彙力・漢字力の充実をはかるため、今まで使った教科書などを総復習してみるとよい。一度使った教材であればその時の記憶もあり、スムーズに学習が進むはずだ。早めに復習に取り組もう。

2 幅広く文章に接しよう

文章を読む力の向上は、文章を読むことでしかはかれない。意識的に文章を読むように努めよう。その際には、小説など好きな分野の本を読むだけではなく、大学入試に出されるような評論・論説文を多く読むようにしたい。大学に入学以降必要になってくる力は、そのような論理的文章を読みこなす力である。受験を突破するだけでなくその先を見据えて学習に取り組みたい。

3 漢字練習で基礎的な問題の得点率を上げる

漢字の書き取り・四字熟語・ことわざ・慣用句・対義語などの分野の問題が多くみられる。しっかり対策しておけば高得点がねらえるだけに、これらの分野の学習には力を入れたい。具体的には今まで取り組んだ教材を総復習するとともに、その分野の教材に毎日取り組むことが必要になる。そのなかで語彙力の充実もはかれる。

傾向分析 時間に十分余裕のある問題構成のため、1つ1つの問題をていねいに解いていこう

1 出題形式は？

大問数は4問、解答数30問の構成で、解答は全問が4者択一のマークセンス方式である。試験時間は60分である。

2 出題内容はどうか？

大問Ⅰの長文問題では文脈に合致する内容を補う問題のほか、適切な語形や代名詞等の指示対象なども問われる。大問Ⅱは会話文問題で、会話の流れから空所に適切な発言を補う形式である。大問Ⅲと大問Ⅳは空所補充問題で、主に大問Ⅲでは会話表現、大問Ⅳでは文法の知識が問われる。

3 難易度は？

文章中の単語や、空所補充で問われる文法項目・表現は基礎的なレベルで、高校3年生までの学習範囲の基礎を固めておくことで対応できる。

受験対策

1 文章をていねいに読んで、確実な解答を心がけよう

試験時間は60分あり、読解には十分な時間がかけられる。文章にはタイトルがついているため、テーマを確認して読解に入るとよい。設問はおおむね文章の流れにそっているので、解答の根拠となる箇所を確認して解こう。内容の理解を問う設問が中心だが、代名詞・代動詞等の指示語の指示対象、不定詞・分詞など動詞の適切な変化形なども問われるので、文脈や構文も意識しながら読み進めていこう。

2 対話の流れをつかみつつ、その他の要素も利用して解こう

会話文は冒頭で場面が説明されているので、これを確認してから読むとよい。正解の選択肢以外は明らかに流れに合わないものも多く、基本的には会話の文脈を考えて、それに最もふさわしい発言を選んでいけばよい。また、空所の直前・直後に疑問文や指示語・代名詞が来る箇所が多いので、それらがうまくつながることを意識すれば、解答はさらに確実になる。

3 基本事項の演習を重ね、速やかな解答をめざそう

おおむね大問Ⅲが会話表現や語句の知識、大問Ⅳが文法事項に関する設問となっている。大問Ⅲは文脈がある程度しっかりしているので、まず補うべき語・表現の意味を考え、それを選択肢から探すとよい。大問Ⅳで問われる文法事項は基本的なものである。過去問題に加えて一般的な問題集で演習を重ね、基礎力を固めておこう。これらの問題をスムーズに解ければ、分量の多い大問ⅠやⅡに多くの時間を割くことができる。

2024年度 数学 一般入学試験【全学部共通】

傾向分析 数学Ⅰ・Aの範囲から、典型的な問題がまんべんなく出題されている

1 出題形式は？

大問は6題の出題で、大問Ⅰ～Ⅲは必答、大問Ⅳ～Ⅵの中から2題選択し、合計5題を解答する。大問Ⅰは小問3問からなる小問集合、大問Ⅱ～Ⅵは1つの分野について3問程度の小問で構成されている。解答形式はすべてマークセンス方式であり、試験時間は60分間である。

2 出題内容はどうか？

出題範囲は数学Ⅰ・Aで、全範囲から偏りなく出題されている。必答問題は数学Ⅰから、選択問題は数学Aの「場合の数と確率」、「整数の性質」、「図形の性質」の3分野から1題ずつ出されている。大問Ⅱ・Ⅲで出題されなかった数学Ⅰの分野は、大問Ⅰの小問集合で補足するなどの配慮がなされている。

3 難易度は？

基本～標準レベルの典型的・定型的な問題が中心である。基礎学力の確認を行うための問題が多く出されており、教科書や参考書の例題に類似した問題が見られる。特別な発想や解法を必要とせず、基本的公式を理解し、使いこなせるように問題集などで練習することで対応できる。

受験対策

1 教科書・参考書の例題を通し、典型的・定型的な問題に数多くあたろう

基礎学力および普段からの学習量の確認をするべく、典型的・定型的な問題がよく出されている。そのため、教科書や参考書の例題を丁寧に解き、基本的公式を理解し、使いこなせるようにしておきたい。その上で、練習問題などを解いて、理解不十分な点を残しておかず基礎学力の定着に努めよう。問題演習を通して、基本的問題が解けるように反復練習しておこう。

2 常日頃の問題演習を通して、正確な計算力の養成に努めよう

全問マークセンス方式であるから、考え方が合っても、計算ミスをすれば得点化することができず致命的である。日頃の問題演習においても、最終の答えが出るまで丁寧に計算する習慣を是非とも身につけておきたい。試験用紙には計算余白が十分にとられているので、普段から計算を適当に書かず、万一ミスがあっても発見できるように整理して書く練習を積んでおきたい。

3 過去問題を解いて、実践的かつ効果的な学習対策を行おう

出題範囲が数学Ⅰ・Aと限られており、日程・方式に関わらず、問題の配列、難易度、内容に類似点が多い。したがって、自分の受験する日程・方式の過去問題だけではなく、なるべく多くの過去問題を解いて、問題のレベル、時間配分などを体得しておきたい。また、過去問題を解くことは、出題範囲全般にわたる偏りのない学習対策になり、実践的で効果的な学習方法である。

傾向分析 決まって出題される傾向の問題に注意して学習しよう

1 出題形式は？

大問2題で構成され、それぞれ2,000～2,400字ほどの論説文が出題されており、試験時間は60分である。解答数は各大問とも16問で、計32問、解答形式は5つの選択肢から正答1つを選ぶ択一式で、マークセンス方式である。

2 出題内容はどうか？

出題内容は固定化されており、毎年決まった形式・内容で出題がなされている。問1は漢字問題、問2は語句の意味を問う問題、問3は接続語・重要語の空欄補充問題、問4～問8では内容説明・理由説明・空欄補充問題、問9は脱文挿入問題、問10は内容合致問題が出題されている。

3 難易度は？

問題文は入試問題としては平易なものが多く、文字数も比較的短いものである。設問についても標準的なレベルのものが多く、極端に難度が高い、または低いものは少ないといえる。ただし、問10の内容合致問題については、選択肢が3行にわたっているため、他の問題よりも読解力が必要となっている。

受験対策

1 問題演習で読解力を養おう

難度の高い問題は出題されていないので、自分にあった問題集を用いて問題演習に取り組んでみよう。その際には設問を解くことよりも、問題文の内容理解に努めることが重要である。何度も読み返し問題文の内容をしっかりと理解してから設問に取り組もう。また、解いたあとにはどのようにして解答を導き出せばよかったかしっかりと復習することが大切である。

2 読書の幅を広げいろいろな文章を読もう

大学に入学してからのことも見据え、自分の興味のある分野に本をしっかりと読むようにしていこう。その際には入試問題に出題されるような硬質の文章を多く読むようにしたい。具体的に、問題演習を行うなかで出会った文章をもとにその出典となる本を読んでもみるとよい。幅広く読書に取り組むことで語彙力も高まり、読解力の向上にも結びついてくる。

3 定期的に模試を受け、自分の力を確認しよう

受験勉強は長丁場である。定期的に自分の力をはかるとともに、入試に向けてどのような学習が必要か考えながら、学習計画を見直そう。過去問題に定期的に取り組むことも、学習計画を作成するうえで参考になる。間違えやすいのはどんな問題か、合格点に達するためにはどこで得点できるようになればよいかがわかれば、学習内容もおのずと決まってくる。